



# 学校だより



1月号

令和7年1月8日  
江戸川区立瑞江小学校

## 「つながり」について考える

校長 牧岡 優美子

令和7年、新しい年になりました。保護者、地域の皆様におかれましては、穏やかな年明けを迎えられたことと存じます。今年もどうぞよろしくお願い致します。

今年の年末年始はのんびりと9連休、テレビを見ていたら「つながり」という言葉がとて多く使われていました。それぞれが全く違う場面でした。

まずは、能登半島を襲った大地震と豪雨で被災した方々のドキュメンタリー。地震は1年前のことなのに、復興が進まない現状を伝えていました。二次避難所の仮設住宅に居る方が「みんなと散り散りになっても、安全のため別の土地に移住する」か「苦難の道でも、顔見知りのご近所さんと協力して復興に取り組む」かと悩んでおられました。

「相談したり助け合ったりできるのは、これまでのつながりがあってこそ」であると。地域の「つながり」の大切さを考えました。

つぎに、箱根駅伝。我が家は毎年、お正月の2日間は朝7時から箱根駅伝を観るのが恒例になっています。ただ走るだけなのに、どうして何時間も観てしまうのかと思うのですが、やっぱり今年も1区から10区まで観てしまいました。217.1kmを10人で1本のたすきをつなぎながら走る駅伝は、なんとも魅力的です。1人20kmほどを、50mを平均9秒の速さで走り続けている計算だそうです。相当なプレッシャーと闘いながら全力で走る大学生の姿は凛々しく、この日のために練習を積み重ね、チームで想いをつなぐ駅伝に感情移入します。しのぎを削るシード権争い、たすきが途切れる繰り上げスタートなど、それぞれのドラマに心惹かれます。「普段から寮生活をしているチームメイトなので、つながりが強いんです」とのこと。「つながり」は、お互いの距離の近さに関係しているようでした。

しかし街角のインタビューで、友達との距離の近さが苦しいと答えた若者がいました。そういえば、以前は「きょうなら」と下校したら、翌日まで会えないのが普通でしたが、今の子どもたちはSNSの発達により、家に帰っても連絡を取り合うことができます。学校の人間関係がずっと続き、それに疲れる子どもが少なくありません。もちろん文字だけの連絡なので、行き違いや誤解が生じ、トラブルが起きることも多くなりました。「つながり」が圧迫、拘束、呪縛のように感じる子どもも出てきました。難しい問題です。「つながり」の大切さを伝えながら、苦しくない、程よい距離感が保てるよう相談に乗り、子どもたちの未来と健康を守れるように、たくさん考えていきたいと思っています。

教職員一同、瑞江小学校の子どもたちのために力を尽くしてまいります。今年も変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。